

2. 学生グループ共同研究報告

なぜ子どもを産むのか — 選択の背景にある「出産の意味」とは何か —

研究代表者：北岡 結

共同研究者：久光美羽

はじめに

第1章 研究の背景と目的

第2章 出産の意味

第3章 調査結果と社会的背景の関連

おわりに

はじめに

幼少期から子どもを産むのが当たり前だと思っていた。「女性とは産む性であり、皆いずれ『母親』になるのだから、当然自分も『母親』になるものだ」と考えていた。だが、いつからか自分が子どもを産むこと、母親になることを想像すると恐怖を覚えるようになっていた。現代において、子どもとは、無償の愛を注がれ、健全に育つことができる環境を無条件に与えられる存在であり、守られるべき存在として認識されている。筆者にはそれができず、産んだとしても自分の子どもを守ることや幸せにすることができないと思ってしまふのだ。今の日本は、経済的な面や社会的な面からみても子育て支援が十分でなく、「子どもを産むことはリスク」であるという考えも台頭してきた。筆者はこうした世の中で、女性が自分の人生を大切にしながら自分の子どもを産むという人生を送ることは難しいのではないかと感じた。それでも子どもを産む人々は多く存在しており、日本では毎日2,000人を超える新たな命が誕生している。そこで筆者は「世の中の女性が出産についてどのように考えているのか、なぜ出産を決断したのか」を知りたいと考え、本研究を企画するに至った。(久光)

筆者は3年次に「出生前診断の広がり」と母親の自己決定－妊婦の『選択』を揺るがすものはないか—というテーマで研究をおこなった。2020年にプレ調査としてヒアリングをおこない、その際に「実は子どもをおろしたことがある」という母親の体験を聞いた。妊娠していた胎児が疾患を持っていたことが出産前のエコー検査で発覚したという。母親である本人には産みたいという気持ちがあったが、周囲の「おろしたほうがいい」という反応に心が荒れ果て、中絶を選んだ。周囲が中絶を勧めた理由は、「経済的不安」「産んでも短命だから」というものであった。上記の事例から「子どもを産むにあたって、何が妊婦の選択を揺るがすのか」という疑問を感じた。今日の日本では、妊娠・出産、その先に待ち受ける育児にかかる費用への懸念を抱く人は少なくない。晩婚化による高齢出産に対しては、胎児の健康に不安を持つ人もいるだろう。「出生前診断」のような医療技術が発達したことにより、胎児の疾患や異常がわかるようになった。子どもを産むことは、人間の本能といえるのか

もしれない。しかし、近年の日本社会は子どもを産むには適した環境とは言えない側面がある。加速する少子化がそれを顕著に示しているだろう。そのなかでも強く「子どもを産みたい」という気持ちを抱いた人々は、出産にどのような意味付けをしてきたのか。本研究では妊娠・出産の経験がある女性を対象にしたヒアリングを主として調査分析を進めていく。(北岡)

第1章 研究の背景と目的

(1) 時代に伴う「子ども」観の変容

現代の日本では誰もが子どもを育てやすい社会なのだろうか。「皆が障害があっても生き生きと人生を歩める社会ならまだしも、今の日本はそうではない。高齢不妊で治療により妊娠した人も障害が分かると、自分たちがすぐに老いるので。(中略)安心して産めばいい、社会みんなであたたく育てる、自立もできる、親は何の心配もしないでいい(中略)という社会なら、また選択も違ってくるでしょう」と語る[北村敏泰, 2020]。

上記は諏訪マタニティクリニックの根津院長の言葉だ。根津院長は多胎妊娠の胎児の数を減らす減胎手術の実施、提供卵子による非配偶者間の体外受精、代理出産、受精卵の段階で染色体異常を調べる着床前診断の実施してきた。生殖医療で倫理的な批判を受けつつも施術をおこない、医療のあり方に問題提起をした。上記の出産の現場からは、現代の日本社会における子どもの存在、子育て観を示すものだと筆者は考える。

(2) 女性が考える出産の「リスク」

日本では子どもを産み育てる環境が整っておらず、若い女性が子どもを産む気になれないことが指摘されている。仕事の継続を望む女性が結婚・出産後に職場に戻れる体制が整っていないところが多い。子育てや教育にお金がかかることや、晩婚化による晩産化、晩産化による出産のリスク考慮などから、子どもを産むことは女性のライフコースにとってきわめて「費用」の高いことになっている[岩上真珠, 2013]。

(3) 研究の目的

本研究の目的は、上記の背景を踏まえたうえで、子どもを産む／産まない理由や背景を調査することで、当事者たちが出産にどのような意味を持たせているかを明らかにすることである。

第2章 出産の意味

(1) 調査方法

今回の調査では、子どもを産むこと・出産の意味について、世代の違う女性たちに会話形式のインタビュー調査を行った。今回、少人数に対して調査を行ったのは以下の理由による。本調査で扱うテーマについて量的な調査は既に実施されているが、この調査では女性たちの回答に彼女らの背景を想像できる材料や生々しさが無い調査結果になっている[柏木 永久, 1999]。そこで本調査では、女性たちの本音やリアリティのあるエピソードを引き出すために最適な方法として会話形式のインタビューという質的手法を採用した。

(2) インタビュー調査の結果

今回の調査では、20代から50代の5人の女性を対象にインタビューを行うことにより、年代による妊娠・出産の経験の有無によって子どもを産むことへの見解の差や、子ども観の差を比較することができる考えた。図表1はインフォーマントの属性を端的に表したものである。

	年代	妊娠経験	出産経験
Aさん	40代	有り	有り
Bさん	40代	有り	有り
Cさん	50代	有り	無し
Dさん	20代	無し	無し
Eさん	20代	無し	無し

図表1 インフォーマントの属性(久光作成)

以下では5人の女性のインフォーマントの発言を記録し、できる限り忠実に再現したものを表記している。妊娠・出産・子どもに関するそれぞれの経験から語られる発言を分析して、産む理由／産まない理由にアプローチした。

【Aさん】

「何で子どもを産みましたかって聞かれたら、私はもう会いたくて仕方がなかったん。(中略)(現在の配偶者とまだお付き合いもしてなかった頃に彼の)赤ちゃんの頃の写真とか見て、この子可愛い!と思って。そんな時にこの子に会いたい、絶対この子に会うねん!え、でも(ということは)結婚すんの?この人と?って(笑)だから結婚自体がちょっと事後的な気がする。私が自分でこの人がいいと思って選んだかって言われたら、(子どものことが先走ってただけだから)選べなかったかな(笑)(中略)(お付き合いを始めてから)避妊具を付けずにすることがあって、半分私の中であのちっちゃい子に会いたって思いもあったのはあったから、もしこれで子どもができたら結婚って流れでも、まあ、まあ(笑)」 「(その後、妊娠をしたが、胎児に重度の障害¹があったことから墮胎を選択して)私は一人子どもを殺してると思うねん。だから、次子どもってなるのも、うん、なんか。まあ、私クリスチャンでもあるからやねんけど、祈ってできる時にできた子は、多分私に面倒見なさいよって神様がプレゼントしてくださるものやと思うからって意味で、一人目はまあいわゆる計画的ではなかったのよ。(中略)二人目、三人目出産したときも(一人目の子のことがあるから)障害があるんじゃないかって可能性は思った。(中略)で、まあ二人に障害(一人は自閉症スペクトラム、一人は斜視)はあったけど、やっぱり私が会いたい!って、そう思って産んだ子やから。産んで良かった、会えて良かったなって思ってる」 「産んだから決意したんかなあと思ったけど、でもやっぱ私決意して産んだんかも。障害があるかもと思って、でも子どもが欲しいって。私自身が一人っ子やったから、昔から子どもをたくさん産みたい!とは考えてたかな。(中略)私は幸せな家庭を作るねん!って思ってたわ」

Aさんは、子どもを産もうと思った理由について、初めは直感だったと語る。配偶者の幼少期の写真に運命を感じた彼女は、結婚を後からついてくるものとして考えるほどに「子ども」を見ていたと言えるだろう。彼女の語りからすると、妊娠前の彼女には子どもを「産む」「会いたい」という気持ちはあったものの、「育てる」ことを意識していなかったように思える。しかし、妊娠中の検査で胎児に重度の障害があるという診断を受け、「育てる」という観点から周囲に出産を猛反対されてしまった。当初産むつもりであった彼女も、最終的

には周囲の意見を聞き入れ墮胎を決意した。彼女は、当時の選択を後悔はしていないものの、二人目と三人目の妊娠の際は最初に感じた直感的な（あの子に会いたいという）気持ちと、子どもを「神様からの授かりもの」だと考えたことから、障害の有無を気に留めずに出産を決意している。

また、Aさんは自身の子どもとしての家族経験が、出産への意思につながっていると語った。自らの一人っ子という境遇や両親の不仲を反面教師のように捉え、昔から「子どもを複数産んで、幸せな家庭を作りたい」と考えていた。

【Bさん】

「私は旦那が遺伝性の全盲やねんけど、（お医者さんには、子どもに）80%遺伝するでしょう、だから子どもは作らないでくださいって病院で言われててん。それでそんな時（私の年齢は）19やっでん。で、まだ妊娠もしてなくて、一応聞いただけやねんけど、そう言われたからまあ（子どもは）いいかって。まあ居らん人生もいいかとおもってんけど。でも旅行とか行って目見えへんかったら露天風呂に行かれへんわけよ、彼は。それでちょっと男の子産まなあかんなって思ってた。子どもは使うもんやねん（笑）」「男の子産まなあかんなんて思って、（旦那に）障害あってもあんた幸せやった？って聞いたら、旦那は幸せやって言うたから。ほんなら引き受けましよう。あんと」

Bさんは、医師からの「子どもは作らないで」という宣告を受けるまで、特に出産を意識したことがなかったと語った（彼女自身はその理由を「まだ若かったからだ」と捉えている）この医師からの宣告を受け、彼女は子どもがいなくても問題ない、別にいなくても良いと考えていた。しかし、配偶者との生活を送るにあたって、性別の異なる彼女では補助ができない状況に直面し、子どもを望んだ。つまり、彼女は子どもに対して「配偶者のサポート」という役割を期待していたと言えるだろう。彼女の語りの中で筆者が印象的だったのは「子どもは使うもの」という言葉だ。一見、子どもを道具として捉えているようにも思えるが、筆者は笑いながら話す彼女の表情や口調からそうしたネガティブな印象を受けることはなかった。これは仮説に過ぎないが、彼女は「使役するもの」としてではなく、「私たちを助けてくれるもの」として子どもを欲していたのではないだろうか。また、彼女が配偶者へ投げかけた幸せかどうかの質問には、障害が遺伝するであろう子どもに対して幸せになってくれるのならそれでいいと考えていたことがわかる。

【Cさん】

「私は6か月3週で子どもを（病気で）おろした。人の親になりたかった。なりきれなかったからそう思うのかな。障害もってても、同じ人間なんやから」「中絶を決めるのって、健常者であることが優位であることを暗示していると思う。毛嫌いしてるわけではないけど、「自分の子どもはこうじゃなくてよかった」みたいな。嫌悪ではなくて、どこか優越感と安堵感があるんやと思う」

「豊富な情報がある世の中、親になることは覚悟。先のことを考えすぎてる。いつどこでだれがどうなるとか分からへん。半年、1年、目の前の生活を考える」「おなかにできた子どもは生

まれてきたいと思っていついたんやから。私が産めなかったという私情はあるけど、覚悟をもって産んだ人をあたたかく見守る社会であってほしいね。赤ちゃんに限らず、だれがいつどこで『障害者』になるかわからんのやから」

Cさんは、妊娠を経験したが産むことができなかったことから、妊娠・出産・育児に対しての理想が高い印象を受けた。障害の有無で命を選ぶことに強い怒りを抱いていた。「豊富な情報がある世の中、親になることは覚悟」という言葉から、生まれてくる命に対して親はその責任を真摯に受け止めるべきという見解がうかがえた。Cさんが障害の有無から命を選ぶべきではないという主張をするなかで、「自分は産めなかった」という悲しみと怒りが強く口調に出ていた。上記の聞き取りでは語られなかったが、Cさんは子どもを産むことができないとわかった時に、感情的になり自身の内腿にフルーツナイフを刺したという。こんな使い物にならない卵巣ならいらぬという気持ちだったと当時を振り返って語っていた。Cさんにとって、「子どもを産む」ということは「通らなければならない道」というような印象だった。子どもを産む意味を考えるとというよりも、自らの幸せには子どもが必要だと考えていたことがわかる。「おなかにできた子どもは生まれてきたいと思っていついたんやから」という語りは、Cさん自身の出産に対する意志の強さと産めなかったという現実とのギャップから出てきたものだとわかる。

【Dさん】

「自分の家庭環境は良くなかったと思うんですね。(中略)自分がこういう環境で育ってきたからこそ、自分が親になるって立場の想像がつかないっていうか。ちょっと言い方が悪いんですけど、子どもを産むことってなんか凄惨いことをするって気持ちになってしまうんです。自分の経験からいくと。でも、世の中には子どもを産んでいる人がたくさん居て、皆が子どもを産む意味って何なんだろうって思ってます」「自分のなかで子どもを欲しいって思ってなくて、あんまり。自分が子どもを産むとしたら、生まれてきた子にしっかり、何とていうか、胸を張れるくらい理由がないと、自分は産んじゃいけないと思込んでいるというか。もし子どもを産むんやとしたら、しっかり子どもが納得できるような、まあそんなものないと思うんですけど。でもそういうものを、確固たる何かを自分が見つけてからじゃないと、無理やなって思ってた」

Dさんは、妊娠・出産ともに経験をしておらず、それらに対してかなりネガティブなイメージを抱いていることが印象的だった。彼女は自らの家族経験から、家庭を「すぐに壊れてしまう脆いもの」だと考えているようだった。そして自らの経験から、家庭の崩れは子どもの不幸につながるとも考えており、自分が親になったときに子どもを幸せにできる想像ができず悩んでいた。この悩みは、「出産をすること＝子どもの人生の責任を負うこと」という認識が彼女の中にあることを表している。彼女は前述のAさんとは違い、「産む」とことと「育てる」ことを絶対的なセットとして捉えているようであった。また、筆者は会話の中で「子どもを産む理由として親のエゴになるようなものは認めない」という彼女の強い意志を感じ取った。だが同時に、エゴではない子どもを産む理由の最適解を模索しており、その最適解さえ見つかれば出産がしたいと考えていると感じられた。

【Eさん】

「私は(妊娠・出産に対して)そこまでネガティブに捉えてしまうような経験はしていない。でも、兄ちゃんが知的障害もって、歳も離れていて…。お父さんお母さんも仲良いけど、私は家族内の誰ともちゃんとコミュニケーションをしてこなかった。誰に対しても『これ正解かな?』『これで合ってるのかな』って、社会的な正解をひとりで探りながら生きてる。この年齢になって結婚とか妊娠とか考えるようになって…。子どもって出来上がった人間ではないじゃないですか。自分が決断して、(子供は)自分と生きていくって決まってるのに、(自分が今のままやったら)子どもの正解って子どもにはないし。ずっと曖昧なまま生きてるのが嫌やから、(妊娠・出産に)胸を張れる理由が欲しい。自分の正解が欲しいなあ」

Eさんには歳の離れた知的障害を持つ兄がいる。両親との関係は良好だが、自分自身が妊娠・出産をしたいという気持ちは持っていないようだ。Eさんには、「自分の子どもが障害を持っていたらどうしよう」といった不安があるようにみえた。彼女は幼い頃から「社会が求める正解」を意識している。知的障害の兄がいることで、普通になれない兄に嫌悪感を抱いていることが背景にあると筆者は考える。聞き取りからはEさん自身が子どもを持つことに対しての「正解」を模索しているようだった。Dさんと同じく、子どもの親になることが親のエゴになってはいけないという意思が見える。

第3章 調査結果と社会的背景の関連

(1)社会的「子ども」観の変容とともに移り変わる出産の意味づけ

榎は近代日本において産業が勃興する過程で、多くの子どもが重要な労働力となっていたのはよく知られた事実であると述べている [榎, 2012]。児童労働は特段社会問題にもならず、当たり前なこととして見なされてきた。また、子どもは早くから家業や家事の手伝いに参加しており、手伝いは遊びや勉強に優先することも多かった [新井, 1993]。この名残からか、90年代までの日本においては子どもを労働力として捉える風潮が強く残っていた。しかし、1994年に児童の権利条約を日本が批准するなど、子どもの人権を最優先とする考えが興り、現代において子どもは守られる存在へと変化しつつある。こうした社会的「子ども」観の時代背景は、女性たちの出産にも大きく影響を及ぼす。教育の充実などから子ども一人に対する子育てコストが増加し、昭和頃主流であった「子どもは授かりもので、産めばなんとなる」という考えから、最近では「出産計画を立てて、考えて産まない」という考え方へ変化した。

(2)インタビュー調査との関連

今回のインタビュー調査結果においても、出産に関してAさんやBさんの回答では重要視されていなかった子育てに付随する不安が、20代であるDさん・Eさんの回答には主題として登場しており、育児に対する考え方を根拠に出産の意味を考えている様子が見えがえた。また、子どもは使うものだと考えるBさんに対して、Eさんは子どもに正解を与えなければならないと考えているなど、親子関係の種類の違いも年代で差が出た要素の一つである。Bさんの話から読み取れる親子関係は雇用主と被雇用者という使役の関係に近いが、Eさんの語る親子関係は教師と生徒のようで、補助の関係に近いように思える。

だが、Cさんの語りには時代背景の影響とは異なる墮胎経験者特有の強い思いが感じられ

た。出産経験のあるAさん・Bさんが終始軽快な話し口調であったのに対して、重々しく語るCさんの語りは、出産経験の有無が出産の意味付けに大きく関与することを感じさせる。また、Aさん・Dさん・Eさんが語りの中に自らの家庭環境を織り込んでいる点から、女性の生き立ちや家族構成も出産の意味に強い影響を与えているのではないかと推測される。

今回のインタビュー調査で明らかになった彼女たちの出産に対する思いは、当初の予想と遥かにかけ離れたものであった。彼女たちは皆、子どもを取り巻く様々な時代背景の影響を受けつつも、ある者は自らの直感に従い、ある者は役割として子どもを欲し、またある者は運命をただ受け入れていた。彼女らの出産に対する考えは、非常に個人的で、誰もが当てはまるようなものでもなく、論理的でも合理的でもない点をも併せ持っていた。

おわりに

本論では、出産の意味を考えるというテーマのもとにインタビュー調査を行い、子ども観の変容から分析を実施した。時代による子ども観の違いから、妊娠・出産に対する見解が異なることが明らかになった。しかし、家族構成や個人的な経験によって出産に対する意味付けは変わり、年代だけで出産の意味を枠付けすることは難しいことも分かった。昨今では、医療産業の進歩が進んでいる、それらの影響を受けて、家族の在り方や子ども観の認識は変化していることは明らかだ。医療技術の進歩を理由に「生」をコントロールすることが増えているのではないだろうか。そのなかで、「なぜ子どもを産むのか」という問いかけが台頭する社会には、人々の抱く「生きづらさ」が見え隠れしていると筆者は考える。「産む／産まない」の選択が、本人の意志として尊重され、適切な援助を受けながら、命と向き合う社会になることを願って本論文の結びとする。

執筆分担

はじめに(北岡・久光)

第1章 研究の背景と目的 (北岡)

第2章 出産の意味 (久光)

第3章 調査結果と社会的背景の関連 (久光)

おわりに (北岡)

参考文献

- デイヴィッド・ベネター (2017). 生まれてこないほうが良かった. すずさわ書店.
- 榎一江 (2012). 近代日本の児童労働——年少労働者の保護と供給をめぐる. 大原社会問題研究所雑誌.
- 岩上真珠(2013). ライフコースとジェンダーで読む家族. 有斐閣.
- 戸谷洋志, 森岡正博 (2019). 反出生主義を考える「生まれてこないほうが良かった」という思想. 青土社.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2010). 出生動向基本調査. 参照先: 国立社会保障・人口問題研究所ホームページ: <https://www.ipss.go.jp/>
- 新井真人(1993). 子どもの手伝いの変化と教育. 教育 社会学研究第53集.
- 森岡正博(2021). 反出生主義とは何か その定義とカテゴリー. 『現代生命哲学研究』.

- 前田拓也 (2020). 障害者はがんばる人なのか?—テレビ表象、感動ポルノ、障害学. 著: 石田佐恵子, 岡井崇之, 基礎ゼミメディアスタディーズ(ページ: 69). 世界思想社.
- 柏木恵子, 永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値—今,なぜ子を産むか—. 日本教育心理学会.
- 北村敏泰 (2020). 揺らぐいのち 生老病死の現場に寄り添う聖たち. 晃洋書房.

脚注

- ⁱ 本論では、個々人の機能的特質に着目しているのではなく、「障害」が社会によってその像が作りあげられてきたという「障害の社会モデル」[前田拓也, 2020]という考えから、「障害」という表記で統一する。